

海外で心に残った記憶と背景

(オーストラリア編)

2023年11月記 松村 眞

はじめに

外国を訪問すると、予期しない体験をして驚いたり感心したりすることがある。見聞きして面白く思うこともあれば違和感を覚えることもある。日本を訪れた外国人と接しても同様に、その時の記憶は時間が経っても容易に忘れない。意図的な結果ではないから他人に伝える機会は少ないが、印象が強いので参考になることも多い。本稿ではオーストラリアで経験し見聞きした驚きや違和感について、事例の状況と考えられる背景を紹介する。

国際 LNG 会議参加とガス採掘基地調査 (1998年5月)

(パース・メルボルン・シドニー)

エンジニアリング振興協会（現在はエンジニアリング協会）から、1996年に「LNG（液化天然ガス）便覧」の作成に協力を依頼された。発注元は現在の石油天然ガス・金属鉱物資源機構（旧：石油公団）だった。日本は天然ガスの利用が増えているのに、体系的に整理された技術資料がなかったからである。天然ガスが日本の消費者に届くまでには、掘削、集積、液化、海上輸送、再ガス化、国内パイプライン輸送と多くの段階がある。それぞれに高度な技術が必要なので、各段階別に複数の専門企業が競合している。このため技術資料が分散しており、企業秘密が含まれていることもあって部分的にしか開示されることがない。一方、必要な技術の全体像が見えないので体系的な理解が普及しにくい。このため、全技術体系を網羅した便覧の作成が計画されたのである。

受託したエンジニアリング振興協会は、天然ガス関連設備企業で構成するプロジェクトチームを編成し、各企業が得意とする分野ごとに執筆を担当することになった。日揮は私が担当になり液化装置の分野を執筆した。I社はLNGの海上輸送タンカーを担当し、受け入れ基地はS建設が貯蔵タンクを、C社が再ガス化装置を担当した。私は参加した各社から専門的な技術資料を入手し、詳細な説明を受けたので非常に勉強になった。他社の担当者も同じ思いだったであろう。会合で討議するたびに便覧に収録する範囲に欲が出て、原稿は1000ページを超える膨大な量になった。ようやく脱稿の見通しがついた2年後に、オーストラリア西部のパースで12回目の国際LNG会議が開催された。この会議は3年おきに開催されるシンポジウムで、数日間にかけて新しい開発の展望や新技術が紹介される。会場には大規模な展示場が併設され、掘削装置やタンカーの模型、それに貯蔵タンクの断

熱構造や安全設備を見ることができる。そこでプロジェクトチームのほぼ全員が参加し、会議が終了した後でメルボルン沖の天然ガス採掘現場を見に行くことにした。

初めて訪問したパースは人口 150 万人の大都市で、都市基盤が整備された安全な街だった。われわれはパースに数日間滞在し、シャトルバスで郊外の会場を往復した。LNG プラント（液化施設）の設計と建設は日揮の主要な事業分野である。このため、われわれとは別に LNG 事業分野の関係者が 10 名ほど国際会議に参加し、いくつかの新技術を紹介した。パースは晩夏のような気候で快適だったが、残念なことに街を散策する時間がなかったので繁華街の様子は見ていない。

次に移動した南部の大都市メルボルンは、もう秋の気候で少し肌寒かった。オーストラリアは広い国だから西部と南部で気候がかなり違うと思った。街には数百年の歴史を感じさせる重厚な建物が多く、ホテルには上品な調度品が備えられていた。夕食前のわずかな時間だがホテルの周辺を歩いてみた。どこも歩道が広く小さな公園があちこちにあった。

メルボルンの市街地から天然ガスの採掘現場までは遠いので、車で現場に近い町まで行ったが、途中には農業を放棄した過疎地域が広がっていた。ところどころ敷地の広い大きな家に「For Sale」の看板がでていたが、周辺は人影がまばらで買う人がいるようには見えなかった。



メルボルンの市街

小さな町なので道路沿いの 2 階建てホテルに宿泊したが、入口がロビー兼食堂になっていて長い廊下に沿っ

て客室が並んでいた。寒かったので風呂に入ろうと思ったがバスルームが寒く、しかもシャワーしかなかった。このため隅にあったヒーターでバスルームを十分に温めてからシャワーを浴びた。日本で風呂場といえばバスタブがあるのが当たり前だが、ヨーロッパでもバスタブがないホテルが多い。体ごと湯につかるのとシャワーだけの違いは、単なる習慣の違いと思う人もいるかもしれない。しかし私は水が豊富な国と貴重な国の違いが、生活習慣の違いになったのではないかと思っている。

天然ガスの井戸はメルボルンの沖合数百メートルの場所にあり、洋上に設置した複数のプラットフォームが採掘現場だった。プラットフォームは鉄製の 5 階建てぐらいで、そこ

から海底の地下に数百メートルから 1000 メートル以上の採掘パイプを挿入しているのがある。数本の採掘パイプを垂直ではなく、途中からほぼ水平に曲げて先端を伸ばしていた。地上には作業計画や採掘器具を管理する管理棟があり、そこで現場監督から説明を受けた。

もちろん英語の説明になるからメルボルン在住の通訳を連れて行った。しかし計測器を見ながら巡回説明を受けるときは、通訳の日本語を待つのがまだるっこしい。それに当然ながら専門用語はわれわれの方が詳しい。そこで誰かが我慢できずに英語で質問すると、相手も英語の専門用語を使って答えた。英語が通じるとわかると部屋に戻っても英語での質疑応答が続いて通訳の出番がなくなってしまった。通訳はメルボルンで仕事をしている日本人の奥さんで、「英語を話せるなら私が来る必要はなかったのに」と寂しそうだった。



洋上のプラットフォーム

私はそれ以来、通訳がいる場所で英語を話すときは挨拶ぐらいにとどめるようにしている。日本人の英語力は人によって大きく違うから、通訳の要否は判断が難しいであろう。だが近い将来、日本人の大半が英語でコミュニケーションができるようになるであろう。高校を卒業するまでに日常会話に必要な単語は習っているから、残るのは臆さずに聞いて話す積極性と慣れではないだろうか。



シドニーのオペラハウスとハーバーブリッジ

メルボルンを訪問した後はシドニーを経由して日本に戻った。シドニーでは半日程度の時間があったので、有名なオペラハウスとハーバーブリッジの周辺を散策した。オペラハウスの近くでシドニー在住の日本人が釣りをしている、シドニーは気候がよく住み心地のよい街だといっていた。そばでミュージシャンが弾いているギターの曲が気に入ったので、記念にCDを買ってきた。オーストラリアから戻って、私は執筆中だったLNGプラントの工程と設備を説明するレポートを脱稿した。他の項目の執筆者も、それぞれの担当部分を脱稿してLNG便覧作成プロジェクトは解散した。残念なことに、この便覧は企業秘密が含まれているので公開されていない。しかし数年後に、石油天然ガス・金属鉱物資源機構（旧：石油公団）に行って閲覧を申し込んだら奥のほうから出してきてくれた。国の予算で作成されたのだから一般公開すべきではないだろうか。

オーストラリアの社会的な背景

- ① オーストラリアは生活の質・健康・教育・自由・民主主義の点で世界最高の評価を受けている優良国歌である。日本は中国に次ぐ2番目の輸出相手国で、鉄鉱石、石炭、牛肉などが輸入されている。平均高度は340mで全大陸の中でもっとも低い。自然環境には恵まれず40%が非居住地域である。理由は土壌の栄養分が乏しいことと、降雨量が少ないので塩害が発生しやすいからである。
- ② 人口は約2500万人と先進国にしては少ないのに、鉄鉱石・石炭・天然ガス資源が非常に豊富である。輸出競争力が強い点で非常に恵まれていると思う。

海外で心に残った記憶と背景（オーストラリア編）終わり